
Winter Again

亜蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Winter Again

【Nコード】

N5835N

【作者名】

亜蘭

【あらすじ】

一年前のステージでわたしが見た、あの人の楽しそうな姿は、今ではとても寂しく見えた。俺の前に現れた女の子の瞳が、とても寂しく見えた。二人の思いと想いは、やがて互いを惹き合い、心を繋ぐ……。『けいおん！』オリ主×梓の二次創作です。

プロローグ

あの音色だった。

ギターの、この駅の奥まで響きそうな心地良い音が、わたしの耳に届いた。

あのとき聴いた、忘れもしない、あの音。

思わず駆け出した――

足音がやんだ。

駆け足で、だけどだんだんとゆっくりになっていく足音。
それが、俺の前で鳴りやんだ――

「あ……」

「その……こ、こんばんは」

「あ、うん。こんばんは……」

十一月。

木枯らしが吹き、だんだん冬に近づく、肌寒い夜。
駅前の広場で、梓と、輝^{おれ}也は、出会った――

プロローグ（後書き）

けいおん！二次創作です。

まだまだ暑い日が続きますが、肌寒い冬が舞台であるこの物語で少しでも冷ましつつ、

そして暖まっていたただけたら幸いです。

第一話

足を止めた原因は、一枚のポスターだった。

『第二十三回私立桜が丘高校クリスマス会！ 貴方も我が校で素晴らしい聖夜を送りませんか？』

日時：二〇××年十二月二十三日 午後六時―――」

「もうそんな季節か」

校門をくぐってすぐに立っていた掲示板の前で、俺は思わず呟いた。

ここ、桜が丘高校では、毎年十二月二十三日、つまりクリスマス・イヴの前日にクリスマス会を開催する。

内容は、合唱部による聖歌斉唱や、演劇部による聖書に記された内容の演劇、科学部による研究発表、そして、軽音部によるパフォーマンスと多彩だ。

まだ先だろうと思っていたのだが、もう告知のポスターが張り出される季節になるうとは。

しかし、

「……俺には関係ないな」

十二月。

クリスマス会まで残り数週間、出演者たちが躍起になって各々の活動をする中、俺は校門を出た。

俺が住むこの街も日々寒くなっていた。

口から漏れる吐息は白く染まっている。

そろそろ厚い上着を用意した方がいいかもしれないと思いながら、俺は足を進める。

その行き先は……、

「あ、輝也くんお疲れ〜」

「お疲れ様です、店長」

扉を開けると、いつものやり取り。

ここは俺がバイトをしている楽器店。

ギター、ベース、ドラムス、キーボード等のバンド系だけでなく、トランペットはサクソフーン等のジャズや吹奏楽に使用される楽器も揃っており、周辺機器や楽譜も置いてある。

商店街に位置する店なので規模は大きくはないが、この街の中ではかなり充実してるのではないだろうか。

俺は更衣室で着替え、店長の元へ急ぐ。

この楽器店の店長。実際に聞いたことはないが、年齢は四十歳前半だろうか。温厚で人当たりのよく、客にも評判がいい。

俺も良くしてもらっている。

「早速だけど、ここにあるダンボールお願いできるかい」

「はい」

俺は足元にあったダンボールを開ける。
中には楽器のメンテナンスに使われる商品が入っている。

「今日仕入れたばかりの新品。足りない所に並べておいて」
「わかりました」

店長から指示を受け、仕事に取り掛かる。
すると、扉を乱暴に開けて店内に入ってくる人物が。

「すつ、すいません遅れましたっ！」

「こらこら雄二くん。遅れるのは構わないけどもつと落ち着いて…」

「今から着替えてきます！」

まるで落ち着いた様子もなく、雄二と呼ばれた男がドタバタと走り去っていく。

相変わらず落ち着きのない男である。

「いやあ、何か進路希望ナンタラつてのを提出してないって、委員長に捕まっちゃってます」

ついさっき更衣室に向かったはずの雄二が、いつのまにか着替えを終えてこちらに向かってくる。

そしてこれまたいつのまにか、店長から仕事をもらったのか小さなダンボールを複数抱えている。

「相変わらずだな」

「何が？」

「何でもねーよ」

「というか輝也、待っててくれてもよかっただろー」

膝をつきチューナーを並べる俺に視線を合わせるように、雄二もしゃがむ。

「お前を待ってて今まで良いことあったか」

「いずれラッキーがあるかもしれないじゃん」

答えになってない。

「ほら、遅刻者はさっさと仕事に取り掛かる」

「つれない奴だなあ」

「はいはい」

ふて腐れながらも雄二は立ち上がる。

そして、思い出したかのように、

「なあ、俺らクリスマス会に出ようと思ってるんだけど……」

そう言って雄二は俺を見据える。

俺が何か言うのを待っているのだろう。

俺の答えは、

「悪い」

「そか」

「……悪い」

「気にすんなよ、らしくねえぞ」

「うるさい」

これもいつものやり取りだ。

作業に入って数十分経ったところ。
カランカランと、ドアが開く音が鳴る。

「まったく。昨日張り替えたばかりなのに、どうやったらギターの弦が切れるんですか」

「いやぁそれほどでも……」

「褒めてないぞ唯」

女の子の声々が聞こえてきた。

五人組で、内三人は彼女らの体と同じくらい大きなギターケースを背負っている。

……軽音楽部か。しかも、俺の高校と同じ制服だ。

「おい輝也！ 女の子だぞ！」

「で？」

「ナンパしてくる……！」

「直球すぎる……！」

俺はゲンコツを雄二の額に食らわす。

「すいませーん。ギターの弦が欲しいんですけど……」

「ほら、行ってこい雄二」

俺は雄二の背中を押す。

「え、いいの!？」

「瞳をキラキラさせんな! 俺よりお前の方が適任だろ」

「ん……まあ、そうだな」

理解したのか、雄二の声のトーンが下がる。
だが、すぐに戻る。

「んじゃ。はいはいたないま〜」

なんかスキップしながら向かっているが気にしない。その女子が若干引き気味なのも気にしない。

俺はそのまま作業を続ける。

「（適任、か）」

俺は自分が発した言葉を心の中で繰り返す。

たしかに、女好きの雄二の方が俺より接し方を知っている（だが、それが恋愛経験に影響するかは別問題）。

だがそこには、もうひとつ意味がある。

「（……雄二には関係ないことか）」

思考を振り切る。またネガティブになるところだった。
バイト中だし気をつけなければ。

そう思い、空になったダンボールを抱え立ち上がると、

「あの……」

目の前に、ギターケースを抱えた小柄な女の子が立っていた。
黒髪のツインテールという髪型。

背がとても低い。150cmあるかどうか分からない。

幼げな顔立ちのその少女は、自身の体と同じくらい大きなギターケースを背負っていた。

「どうされました？」

もちろん店員としての口調で応じる。

「あの、ポリツシुकロスありますか？」

ポリツシुकロス。ギターのメンテナンスで使用する布のことだ。
俺は、今抱えているダンボールの中を漁る。

「それなら……ちようどこここに」

「あ……」

「種類はこれでよかったですか？」

「あ、はい。大丈夫です」

ツインテールの少女はおずおずと受け取る。

「他に何かお探しのものは？」

「いえ、これだけです……あ、あのっ！」

不意に、少女の声が最後だけ大きくなる。

俺は驚きはしなかったが、唐突だったので思わず動きを止めた。

「……何か？」

「えっと、その……」

少女は言い辛そうに手をもじもじと動かす。
すると、決心したのか、

「あの、もしかして——」

「あーずにゃあーくん！」

「ふにゃあっ!？」

「うおっ！」

突然何かが少女に飛びつき、少女だけでなく俺までもが声を上げてしまった。

飛びついたのは、栗色の髪をした少女だった。
どこかで見た顔だが、思い出せない。

その少女は愛おしそうに頬擦りを始める。

「あずにゃーくん、あっちのギター見に行こうよ」

「ちょ、唯先ぱ……あ、ありがとうございました!」

「え？ あ、はい」

そのまま栗色の髪の少女に引つ張られていった、黒髪ツインテールの少女。

俺は、曖昧な返事をするしかなかった。

「なんだ輝也、知り合いでもいたのか？」

ぼーっとしていた俺の元に、雄二がやってくる。

「いや別に。そういうお前は？」

「答えはいつも一緒だ」

ナンパは失敗したということか。

「あの子たち、俺らと同じ桜が丘高だよな」

あの女の子達がそれぞれの会計を済ませ、店を出た後、雄二が話しかけてきた。

彼女達が身に着けていた学生服は、桜が丘高校のものだ。

ちなみに、雄二も俺と同じ桜高だ。

「ギターケース背負ってたし、女子軽音部か」

「だな。去年から共学になって、俺ら男子軽音部も出来たけど」

そう。桜が丘高校は近年の少子化の影響で、年々生徒数が減少していたらしい。

そこで、去年から共学になり、男子生徒を入れることになったのだという。

「……」俺ら「？」

俺は雄二が言った言葉を聞き返す。

「一応、男子軽音部に在籍してるぞ」

「なんで」

「俺の隣は空けてあるからな」

「他の奴探した方がいいんじゃないか？」

「お前以外にギター弾ける奴は知らないなあ。いや、お前以上に、
か」

子供のような笑みを浮かべる雄二。

「簡単に言っと、いつでも戻ってこいってことだ」

「……努力するよ」

その直後、店長がバイトから上がっていいと伝えられた。

俺達は更衣室で制服に着替え、帰り支度をする。

「今夜も駅に行くのか？」

雄二が上着を羽織りながら言った。

「そのつもりだけど」

「ふうん。なあ、」

「ダメだ」

「まだ何も言っていないだろー」

「俺も混ぜてくれ、だろ？ お前エレキだからダメ。やかましくな
る」

「ちえっ、つまんねえの。俺もアコギ始めよっかな」

「必要ねーよ」

俺はロッカーを閉じ、出口に向かいながら、

「お前はエレキの方がキマツてるからな」

「お前………それって告白か？」

「本当にエレキギター並みにやかましい口だなっ！！」

意味不明なことを口走る雄二の顔面に、右ストレートが直撃させた。

すっかり空は黒く染まり、星々が輝いていた。
夜は特に冷える。

「そろそろこれも出来なくなるな」

そんなことを呟く。

バイトの後、俺は家に帰り、夕食を軽く済ませた。
制服から私服に着替え、上着もちゃんと羽織り、俺は家を出た。
いつてきます、なんて言葉は言わない。
伝える相手はいない。

俺の背中には、ギターケースが。

到着したのは、この街の駅だった。

現在の時刻は夜七時半。

仕事帰りが多いのか、プラットホームから人々が溢れて来る。電光掲示板には、現在の気温が表示されている。

「三度つて……通りで寒いはずだよ」

これはうかつかしてられないな。

俺は足を速め、いつもの場所へ赴く。

プラットホームに続く階段から少し離れた、歩行者用の通路。そこが、俺のいつもの場所だった。

ギターケースを下ろし、家から持ってきた折り畳み式の椅子を展開。

そこに座り、下ろしたギターケースを開ける。

「今日もやりますか」

中に入っていたのは、愛用のアコースティックギターだった。

第一話（後書き）

さ、サボってたわけじゃないぜ！

修正作業と英訳に時間を取られていただけだぜ！

オリジナル小説もよろしくね！

第二話（前書き）

前回投稿した第一話と第二話はくっつけて、今回を第二話とします。
ご注意ください。

第二話

それは偶然だった。

たまたま母から買い物を頼まれ、
たまたま近所のコンビニがいつのまにか閉店していて、
たまたま駅前のコンビニにまで足を運ぶ必要ができた。

午後八時頃に、その音は私の耳に届いた。

しっとりした、どこか寂しげなメロディが、アコースティックギターの音に乗ってこの駅に響く。

とても小さな音量だったが、確かに聞こえた。

私は、思わず駆け出した。

駅の傍の歩行者用通路の、隅の隅に、俺は座って、そしてアコースティックギターを弾いていた。

俺の頭の中は既に空っぽだった。

いや、違う。ギターから鳴る音だけが響いていた。今弾いてる曲はバラードだが、俺は無我夢中で腕を動かし、弦を鳴らす。何も考えずに。

俺の周りに集まる人々はいない。最初は足を止める者がちらほらといたが、すぐに離れていった。

別に下手という訳ではない。自分で言うのも何だが、俺はそこそこの腕だと自覚している。

なら何故か……

いや、そんなことは正直どうでも良かった。

俺は再びギターに意識を向けようとし、

俺の目がある物を捕らえた。

小柄な二本の足。

俺は、ゆっくりと顔を上げる。

「あ……」

思わず声を漏らした。

その顔に、俺は見覚えがあった。

「その……こ、こんばんは」

「あ、うん。こんばんは……」

走ってきたのか、息を切らし肩を上下に小さく上げている。

黒髪のツインテールも揺れていた。この季節なので、さすがに汗はかいてないようだったが……

何よりも、

「君は……今日うちの楽器店に来てたよね？」

「はっ、はい！ あの時ありがとうございました」

あの時というのは、恐らくポリッシュクロスのことだろうな。

「別にお礼を言われることじゃねえよ。バイトなんだし」

「それでも、ですよ」

「良いクロスは見つかったか？」

「はい、おかげさまで」

「そいつはよかった。……ところで、君の名前は？」

「あ、はい。なかのあずさ中野梓と言います」

「中野ね。俺は——」

「谷口輝也先輩ですよ」

中野梓という少女の口から、なんと俺の苗字が出てきた。

「俺のこと知ってるの？」

「はい。同じ桜高ですよ。私は一年ですけど」

「あ、ああ。しかし驚いたな。俺そんなに有名ってわけじゃないのに」

まさか俺のことを知っている後輩がいるとは思わなかった。

特に委員会とかに入ってるわけではないので、基本的に下級生と関わることはない。

「……もちろん知ってますよ」

「ん？」

「谷口先輩のこと、知ってますよ。その……」

中野が言いよどむ。

俺は中野が何を言おうとしてるのか、すぐにわかった。

「先輩が、去年軽音部にいたことも……」

やはり、か。

瞬間、俺は傍に置いてあるギターケースを開き、掴んでいたギターを片付け始めた。

「悪い。今夜はもう寒いし、帰るわ」

「えっ、あ……はい」

悪いことを言ってしまった罪悪感が、演奏が聴けず残念に思ったのか、中野はしゅんとする。

そんなことを気にせず、俺はギターケースを背負う。

「送ろうか？」

「あ、大丈夫です。家はすぐそこなので」

「そうか」

女の子だし、夜は危ないと思ったが、そもそもこんな夜に、しかも駅に女の子が一人で出歩くのは珍しいしな。

学校帰りならわからないでもないが、中野の右手にコンビニの袋だけが握られているのを見ると、きっと何かを買いに來ただけなのだろう。

「んじゃ、気をつけてな」

「はい。また……学校で」

くるりと振り返り、ツインテールが舞い、中野は走っていく。
その後姿を、俺はしばらく見つめていた。

「また学校で、ね……」

それがどういう意味なのか、俺はなんとなくわかるような気がした。

一年前の四月。

桜が丘高校に入学した直後に、俺は軽音部に入部した。

正確には、俺が作った。

以前は女子高だったため、軽音部は女子のみで構成されており、しかもそのメンバーの仲が良いのが外からでもわかり、俺はその中に混ざろうとは思えなかった。

だから作った、男子軽音部を。

驚くほどに早くメンバーが集まった。ギター、ベース、ドラム。

そのギターが雄二だ。

そいつらは中学でもそれぞれバンドをやっていたらしく、実力もかなりのものだった。

毎日の練習がとても楽しく、夏にバイトしながら合宿をし、夏休みが明けた後の学園祭でも大成功を収めた。

冬のクリスマス会は……

クリスマス会で……全てが崩れ去った。

いや、壊したんだ。男子軽音部を作った、俺本人が……。

朝は辛い。

駅でストリートをしている身の俺は、どうしても夜寝るのが遅くなってしまう。

昨日なんて、今日提出の課題をやったものだから、ベッドに潜ったのは深夜二時になってしまった。

そろそろ駅で弾く時間帯を早めるべきだな。いや、バイトがあるからこれ以上は無理か。

「朝は辛い……」

同じことを、今度は声にする。

そうしてる内に、教室前までやって来た。

中に入り、クラスメートに適当に挨拶し、席に着く。

「おはようさん」

目の前の席に座っていた雄二が、眠たそうな目を擦っていた。

「俺より早いなんて珍しい」

「お前が言つなよ輝也。朝が弱いのはたぶんお前の方が一枚上手だぜ？」

そんなもん上手になりたくない。

「じゃあなんで」

「朝練だよ。昨日隆志たかしの奴が良いフレーズ思いついたってメール来たから、今朝みんなで確認してたんだ」

隆志というのは、男子軽音部のベースリストだ。俺もよく知ってい

る。

「で、どうだった？」

「まさかバードだとは思わなかった。あいつ、筋金入りのハードロック好きなのにな。けど、なかなかよかったぜ」

「そいつはよかった」

「お前にも聞かせてやりたいんだけどなあ……っと、余計なお世話だったな」

やや苦笑いを浮かべながら、雄二はくりと自分の机に向かう。

……雄二には迷惑掛けてばかりだな。

「俺もさっさと振りきらねえとな」

「なんだって？」

「なんでもない。ほら、もう授業始まるぞ」

「あ、輝也。物理の宿題見せて」

「……もう一度言う。授業始まるぞ」

直後、チャイムが鳴った。

退屈な授業を乗り越え、昼休み。

昼食のパンを買いに、雄二とともに購買にやって来たのだが、

「絶賛満員中だな」

「だな」

俺達の目には、人、人、人の大群だった。
生徒たちは躍起になって、自分たちの昼食を確保しようとしていた。

「俺らの分残ってるかな」

「残ってたとしても、たぶんマズイのばっかだろうぜ」

「例えば？」

「漬物クリームパンとか、海苔チョコパンとか」

嫌すぎる。

というか何でそんな健康に悪影響を与えそうなもん売ってるんだ。

「どうする？ このままじゃマジでひどいパン食わなきゃいけないぞ……」

「仕方ない。ここは乱闘覚悟で……」

「やめなさい」

たかが昼食で怪我してたまるか。

そんな会話をしていると、いつのまにか人だかりがみるみる減っていく。

なんだ？

「今だ！ このチャンスをおおおおおお！！」

大声を発しながら、飛び掛かるかように購買へ走る雄二。
だが数秒の沈黙の後、ガックリとうなだれた。

「どうした」

答えがなんとなく予想できるが、一応聞いてみる。

雄二は涙を流しながら、

「い、いちごカレーパンしか残ってなかった……」

うわあ……。

そうして、俺達の昼食は水のみという結果になった。

第三話

正直、放課後までなら耐えられると思っていた。

「腹減った……」

昼休みの後が体育の授業だったことを忘れていた。

エネルギーを取ってない状態で運動をすれば、空腹も加速するはずだ。

しかも、今日はマラソンだった。

今日はバイトの日じゃないので、家に帰れば……と思ったが、俺はあることを思い出す。

「冷蔵庫の中空っぽだった……」

今朝朝食の準備をするときに冷蔵庫を開いたのだが、見事に何もなかった。

幸い食パンが残ってたのでそれで済ましたが、夕飯の分は当然ない。

つまり、今から買い物に行かなければならないのだ。

そしてやっと飯にありつける、と。

「無理だ。どこかで食べていこう」

桜高は買い食いは禁止されているが、別にやっただってどうこう言われるわけではない。

それ以前に、今は緊急事態だ。空腹で倒れそう。

俺はわずかな力を振り絞り、近くのスーパーマーケットへと足を進める。

進めようとした。

ドンッ！ と、誰かにぶつかった。

「うおっ！」

「きゃあっ！」

何とか踏みとどまるが、目の前の人物は衝撃で尻餅をついてしまった。

「す、すみません！ ぼーっとしてて……あ」

そこで固まる。

目の前で座り込んでいたのは、黒髪の女の子だった。

「中野？」

「いたた……た、谷口先輩？」

俺は手を差し伸べ、中野を起き上がらせる。中野は痛そうにお尻を擦った。

「悪かった。どこか痛むところあるか？」

「いえ、大丈夫です。こちらこそすみませんでした、ぼーっとしてて……」

「いや、俺が悪かったよ」

「そんな、わたしの方こそ……」

いつのまにか謝罪ループに突入した俺たち。そのとき、それを壊す『ぐう』という音が、俺の腹から鳴った。

「先輩……お腹減ってるんですか？」

「へ……減ってないね」

「無理してません？」

「無理してないもんね」

中野はなんか嬉しそうににやけている。俺は恥ずかしいのを堪え拒否する。

そして、再び『ぐう』と間抜けに鳴った。しかもさっきより大きい。

「先輩のお腹は正直ですね」

「ぐう……」

何も言い返せねえ……。

すると、意地を張る俺にいたずらっぽい笑みを浮かべる中野は何かひらめいたのか、

「あの公園のベンチで少し待っててもらえませんか？」

「ん？」

「すぐ戻りますので」

それだけ言うと、中野はパタパタと駆け出してしまった。

よくわからんが、とりあえず言うことを聞いておこう。

五分ほど経ったところ、公園のベンチで空腹を耐えていた俺の元へ、中野が戻ってきた。

「お待たせしました」

中野は両手に持っていた、ナプキンに包まれた何かを一つ渡す。
俺はそれを受け取り、ナプキンをめくると、

「あ、ホットドッグ」

「近所に美味しいお店があるって友達から聞いたので、せっかくだから買ってきました」

「へえ、知らなかったな……って、俺の分まで買ってくれたのか？」

「お腹、空いてるんですよね？」

「す、空いてないもんね」

「ホットドック凝視しながら言っても説得力ないですよ」

見事に指摘される。

俺の手の中にあるホットドッグは、出来立てなのか湯気が出ており本当に美味そうだ。

「いいのか？」

「どうぞどうぞ」

「マジで？」

「遠慮なせずに」

「なら、いただきます」

アツアツのホットドッグにかぶりつく。

ソーセージのジューシーな味わいが口の中いっぱいになり、そして腹の中まで満たされていく。

「どうですか？」

「すげえ美味いよ」

「それはよかったです」

中野も嬉しそうにホットドッグを食べる。

「ほんとありがとな。今度俺が何か奢るよ」

「そんな、悪いですよ」

「それじゃ俺の立場がないだろ。後輩に奢らせたんだし」

「では楽しみにしてますね」

「おう」

俺は頷き、再びホットドッグを食べ進める。そこで、中野のそばに置いてあるギターが目に入った。

俺は何を思ったのか、

「中野は、クリスマスコンサートに出るのか？」

「え？」

中野はキョトンとした表情を浮かべる。

「たしか中野は女子軽音部だよな。文化祭にも出てたし、クリスマスコンサートにも出るのになって」

「ああ、はい。そのつもりですけど」

「そうか」

そこで話を切る。

……何聞いてるんだろうな、俺は。

「先輩は」

「ん？」

「谷口先輩は、出ないんですか？」

遠慮がちに尋ねる中野。この間のストリートの件もあってか、かなり申し訳なさそうだ。

「出ないよ。そもそも、俺はもう男子軽音部で弾いてないしな」
「そう、ですか」

しゅんとしてしまう中野。なんだか俺も申し訳なく感じてきた。

「……聞かないのか？」

沈黙を破るためか、俺は思わずそう口にした。
中野が顔を上げる。

「なんで俺が男子軽音部で弾かなくなったのか」
「え、その……聞いても、いいんですか？」

困惑しつつ、中野は確かめるように問いかける。
そんな彼女の様子を見た俺は、さっきの自分の言葉を思い出し、

「……悪い。やっぱだめだ」

情けなく否定した。

第四話

今日は土曜日なので授業は午前中で終了した。

特にやることもなかったし、夕方からバイトがあるのでさっさと帰ろうと思ったが、その前にやることがあった。

あの後、俺と中野は特に会話もなく家に帰ったが、そのときの彼女はとも申し訳なさそうにしていた。

きちんと謝らなければ。

そう思った俺は、中野が所属している女子軽音部の部室に訪れることにした。

そして今、その部室の前にいるのだが……

「……」

窓越しに映る、五人の女の子が楽しそうに演奏していた。

ドラムが、キーボードが、ベースが、ギターが、それぞれ弾むように音を出している。

そして、その中には中野の姿もあった。彼女もまた、他の四人と一緒に笑いあっていた。

俺は、逃げるようにその場から去った。

バイト中、俺は上の空だった。

昼間の、女子軽音部のあの楽しそうな姿を見て、俺は家まで走って帰り、バイトの時間まで呆然としていた。

理由はわからなかった。

なぜ俺はあのとき走り去ったのだろうか？

なぜ笑顔でギターを弾く中野を見て走り去ったのだろうか？

「輝也くん？」

店長の声で、俺の意識がバイトに戻る。

俺は慌てて店長に振り向いた。

「は、はい」

「どうしたの？　なんだか上の空みたいだけど」

「いえ、大丈夫です。すいません」

「いやいや。君くらいの歳になると、いろいろ悩みもあるんだろう」

店長が穏やかな笑みを浮かべる。

本当に温厚な人だと思った。

「今日はもう上がりでいいよ。暗くなるのも早くなってきたしね」

「わかりました。失礼します」

「またね」

俺は挨拶をし、ロッカーで着替えを済ますと、あらかじめ持ってきたアコースティックギターを背負い、駅に向かった。

今夜もひどく寒かった。本格的に冬が到来しているのだと実感させる。

いつもの場所に到着すると、

「あ、先輩」

中野が一人立っていた。

「こんばんは」

「おう……どうしたんだ？」

「先輩を待ってたんです」

「俺を？」

「今夜は弾きに来るのかなと思って」

こんな寒い中、一人で立ってたというのか。

「もし弾きに来なかったらどうするつもりだったんだよ」

「そ、そのときはそのときです！」

「なんだそれ」

「そんなことよりも……早く先輩の演奏が聞きたいです」

中野が恐る恐るそう口にする。

そうか、俺のギターを聴くために……

「じゃあ、一曲」

そう言つと、中野の表情がぱあっと明るくなった。

さっきまで寒さを堪えるのに必死だったのに、よほど聴きたかったのだろう。

俺はギターケースを開け、チューニングし、準備を整える。

目の前に、観客として立つ中野に目で合図をし、俺はギターを弾き始めた。

悴んだ手を動かし、必死に弾く。乾燥した空気に音が響く。

俺はボーカリストではないので、演奏に歌はない。
ただ、ギターとして引き続ける。

視線を弦に向けていたので、中野の顔が見えない。
どんな顔で聴いてくれているのだろう。

そんなことを思いながら、俺は弾き続けた。

曲が終わり、俺は右手を止めた。

顔を上げると、小さな拍手が聞こえてきた。中野の拍手だ。
だが、彼女の表情は、ひどく悲しいものだった。

「どうだった……？」

彼女の表情で、大体答えがわかったが、俺はあえて聞いた。
中野の口が開き、

「とてもお上手でしたけど……その、なんだか寂しく聴こえました」

やはり、と思った。

俺は一旦ギターをケースの中に仕舞い、中野と向き合った。

「聞いてくれるか？」

「え？」

「俺がステージで弾かなくなった理由」

返答を聞く前に、俺は話し始めた。

「俺さ、去年のクリスマスに両親を亡くしたんだ」

その一言で、中野の表情が驚きで強張った。

「俺の母さん、病気でさ。いつも入院ばかりしてた。親父は母さんの治療費と、俺の学費のために毎日遅くまで働いてて、俺はいつも家に一人だった。まあ、別に寂しくはなかったけど、俺はそんな二人が心配だったんだ。でも学生だし、バイトしても大した金は稼げなかった。そんなときに、俺はあることを思いついたんだ」

「何を、ですか？」

「俺の演奏を聴いてもらおう、ってな」

俺は続ける。

「去年の文化祭は母さんは入院、親父は仕事で忙しかったから無理だったけどな。だから俺はクリスマスコンサートに招待した。親父はちょうど休みが取れて、母さんも体調が良かった。二人が聴きに來るってわかって、俺は男子軽音部の人々と練習しまくった。曲もたくさん書いた。いつもがんばってる親父と、病氣と闘ってる母さんを、ステージの上から励ましたいって思ってた。そして、コンサート当日に……」

俺は一息ついて、

「コンサート会場に來る途中に、交通事故で死んだ」

「そんな……」

「ドラマみたいだろ？ でも嘘じゃなかった。本当に起きちゃった。俺は演奏の後、病院から連絡があって、駆けつけたときには既に手遅れだった」

「先輩……」

「俺が、コンサートで演奏を披露するって言わなきゃ、今でも生きてたんだ。俺が二人をころ——」

「先輩——」

途端、俺の言葉を遮るように、中野は俺の腕に抱きついた。

第五話

俺は突然抱きつかれたことに驚きを隠せなかった。

いや、年下の女の子から抱きつかれたら誰だってびっくりするだろう。

俺はそつと腕にしがみついている女の子に声をかける。

「な、中野？」

「そんな悲しいこと言わないでください。先輩がご両親を死なせたなんて、言わないでください……」

震えた声を発する中野。俺は焦りを落ち着かせる。

「先輩は、それでギターを？」

「……ああ。もうステージには立たないと決めた。俺のギターなんて、誰かに聴かせるものじゃないって」

「……嘘です」

「なに？」

中野は俺から離れ、顔を見据える。悲しそうにも、怒っているようにも見えた。

「誰かに聴かせるものじゃないだなんて、嘘です」

「嘘じゃねえよ」

「嘘ですよ!!」

中野の声が大きくなる。予想もしなかったが、俺もむっとなり声を荒くする。

「俺が嘘じゃないって言ってるんだ。中野が決めることじゃねえだろ……！」

「先輩のことはわかりません。だけど、先輩が本当はギターが弾きたいことはわかります！」

「え？」

「だってそうじゃないですか。誰かに聴かせるつもりがないなら……なんで夜の駅で、ストリートとして弾いているんですか！」

瞬間、俺は、頭の中の言葉が中野のもので埋め尽くされた。

「弾きたくないなら、もう二度と弾かないって決めればよかったじゃないですか。音楽から離ればよかったじゃないですか。でも、先輩は本当は弾きたかったんでしょう？ 誰かに聴かせたくて仕方なかったんでしょう？ 去年の、先輩のご両親みたいに」

何も言い返せなかった。

中野の言うとおりだった。

「けど、俺の演奏を聴かせようとしたから、俺の両親は……」

「先輩のご両親は、頼まれたから聴きに行こうとしたんですか？」

「ッ……！」

「違いますよ。ご両親は、先輩の演奏を聴きたかったからクリスマスコンサートに行こうとしたんですよ。事故のことはとても残念でしたけど、その直前まで、すごく楽しみにされてたはずですよ」

中野の言葉が頭の中で渦巻く。

「今でもきつと楽しみにしてますよ。空の上で、先輩の演奏を」

そう言って、中野は微笑んだ。

俺はしばらく何も話さなかった。いや、話せなかったといっていだらう。

中野も、俺が何か言うまで待っていてくれるようだ。そして、

「今日は、もう帰るか」

と、やっと俺の口から言葉が出た。

中野は予想外だったのか、ぽかんとした表情を浮かべる。俺はギターを片付けると、

「送ってくよ」

「あつ、は、はい」

中野が慌てて俺について来る。

五分くらい歩き、中野の家に到着した。なんだか大きな家だった。

「じゃあ、またな」

俺は中野の挨拶も待たずに背中を向ける。そこで足を止めた。

「先輩……？」

「俺、実は臆病者だったんだな」

「え？」

「なんでもねえよ」

その言葉を最後に、俺は走り出す。ポケットから携帯電話を取り出し、番号を打つ。

画面に、『雄二』の名前が表示された。

十二月二十四日はクリスマス・イヴだ。

誰もが知ってるこの日、桜が丘高校でクリスマス会が開催される。文化祭と違って、約一時間半で終了と比較的小さなものだ。

内容はもちろんクリスマスにちなんだもので、合唱部は聖歌を歌い、演劇部はサンタクロースが登場する物語を演じ、軽音部は、クロスマスソングを熱唱する。

「みんな〜メリークリスマス!!」

女子軽音部の演奏が始まった。

女の子五人による演奏は、演奏している姿がとにかく楽しそうで可愛らしくもあった。時には飛び跳ねたりもしている。

もちろんその中に、中野梓の姿もあった。女子軽音部の中では唯一年下で背も低い彼女だが、ギターの腕は誰にも負けてない。今もソロパートを華麗に弾いている。

素直に、すごいと思った。

この間の部室でもそうだった。ここまで楽しそうに演奏できるものなのか。

「盛り上がってんな」

ここはステージ裏。

ふと、誰かが俺の肩を軽く叩いた。振り返ると、雄二がいた。

「だな。みんな楽しそうだ」

「観客もけっこう盛り上がってるみたいだぞ」

「頼んでたギター、届いたか？」

「ばっちりだよ、ほら」

そう言つて雄二はすでに手にあつたエレキギターを渡す。俺はそれをしっかりと抱えた。

これは、俺が去年のクリスマス会で使用した、そして今までずっと家に置いたままだったギターだ。

先週楽器屋の店長にメンテナンスをお願いし、つい先ほど届いたのだ。正直、ギリギリだ。

そのとき、客席から歓声が上がった。どうやら女の子たちのステージが終了したようだ。照明が消えると、俺と雄二、そしてそばにいた他のバンドメンバーはステージへ移動する。

各自セッティングを終え、みんなの視線が俺に集中する。

「さてと。いよいよ俺らの出番だが、調子はどうだ？」

雄二が声をかける。これは、最終確認だ。

あの夜、中野と別れたあと、俺は雄二たちに電話をした。バンドに戻りたい、と。

みんな喜んで迎えてくれた。今まで俺のわがままに付き合い合わされたにも関わらず、以前と変わらないみんなだった。

嬉しかった。すぐさま俺はエレキギターのメンテナンスを店長に頼んだ。みんなでまた練習をした。

そして、今、再びステージに立っている。

「そうだな……」

俺は視線を横に向けた。そこには演奏を終えたばかりの中野の姿があつた。彼女は笑っていた。そして、俺も笑っていた。

「最高だ」

照明が、光り輝いた。

エピソード

息が白く染まる。

俺はコーヒーを飲みながら、イルミネーションに囲まれた駅前に立っている。その間、数時間前に終了したクリスマス会のことを思い出していた。

大成功だった。雄二のギターの音も、ベースも、ドラムも、そして俺のギターも、ひとつの音となって観客に伝わったと思う。ちなみにボーカルは雄二だ。ああ見えて歌は上手い。

俺も、この一年間溜め込んだ思いをすべて音にしたつもりだ。今は達成感でいっぱいだった。

「谷口先輩！」

どうやら待ち人がやってきたようだ。

小さな体を白いコートで包み、黒い髪を揺らしながら、中野梓が走ってきた。

当然、彼女も笑顔だ。

「すみません遅くなって」

「いや、俺が呼んだんだから謝らなくていいよ。飲むか？」

「はい、いただきます」

俺はもうひとつのコーヒーを渡す。中野は小さな手で缶の蓋を開けた。

「それで、用ってなんでしょうか？」

「ん、ああ。お礼を言おうと思ってな。ありがとな。中野のおかげでいい演奏ができた」

「そんなことないです。あれは先輩のギターの腕ですよ」

「いや、技術のことじゃない。俺の心を救ってくれたことだよ」

「そんな、わたしは大したことしてません。わたしはただ先輩の演奏が聴きたかったから……」

「それでもだ。ありがとう」

俺は中野の頭を撫でる。背が低いから撫でやすいな。

「子供扱いしないでくださいよ」

「中野の背が低いからだ」

「気にしてるのに。もうっ！」

すると、中野が俺の手を両手で掴んだ。

「中野？」

「その……わたし、先輩に伝えたいことがあって」

顔を赤く染める中野。その表情で、俺は中野が何を言いたいのかを理解した。

俺も緊張してきたのか、周りの空気が冷たく感じた。

「……………好きです」

空から、雪が降り始めた。

エピソード（後書き）

後日、活動報告にて後書きを書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5835n/>

Winter Again

2011年1月13日07時12分発行